

## 資本論 第二巻 資本の流通過程 第二篇 資本の回転

## 第十一章 固定資本と流動資本に関する諸理論。リカード

## ◆マルクスは、

- ・資本のうち、生産手段すなわち原料・補助材料および労働手段に転換される部分は、生産過程でその価値の大きさを変えないとして、『不変資本』と名づけた。
- ・資本のうち、労働力に転換される部分は、生産過程でその価値を変えらるゝとして、『可変資本』と名づけた。
- ・生産物には、不変資本  $c$  + 可変資本  $v$  + 剰余価値  $m$  という価値がある。

## ◆労働手段に投じられる資本部分⇒固定資本、その他の資本の成分⇒流動資本。

- ・不変資本のうち、機械などの労働手段を、固定資本という。

## 317 頁 3 行目

\*リカードが固定資本と流動資本との区別を持ち出すのは、価値法則の例外、労働賃金の率が物価に及ぼす場合を説明するためでしかない。

———このことについては、第三巻第十一章で述べる。

(・リカードは、価値法則の例外 (=労働賃金の率が物価に影響を及ぼす) を説明するためだけに、固定資本と流動資本との区別を持ち出す。)

## 317 頁 9 行目

\*リカード『経済学原理』

- ・リカードが言う、二つの資本種類とは何か。  
固定資本は労働手段であり、流動資本は労働に投ぜられている資本である。
- ・流動資本が、一方では可変資本と混同され、他方では『対立』(?) が、価値増殖過程ではなく、流通過程から取り出される。

## 317 頁後 1 行目

◎二重に誤った規定

- ・第一。固定資本の耐久度の相違と、不変資本と可変資本とからなる資本構成の相違とが、同等なものと考えられている。
  - ・「不変資本と可変資本とからなる資本構成の相違」は、剰余価値の生産における相違を規定する。
  - ・「固定資本の耐久度の相違」とは、価値増殖過程においては、価値が生産手段から生産物に移される仕方に関係があるだけである。また、流通過程においては、投下資本の更新の周期に関係があるだけである。

- ・第二。同じ価値量である不変資本の労働手段と労働材料の割合ではなく、いっさいは、生産手段に投ぜられた資本と労働力に投ぜられた資本にかかっているのである。
  - ・労働材料は労働手段と同じ範疇に属し、労働力に投ぜられた資本価値に対立する。
  - ・労働力に投ぜられた資本部分は、労働材料に投ぜられた資本部分と同じ部類にはいつて、労働手段に投ぜられた資本部分に対立するのである。

### 319 頁後 8 行目

\*リカードにおいては、資本価値のうち労働材料（原料と補助材料）に投ぜられた資本は、固定資本・流動資本のどちら側にも現れない。

- ・固定資本にはふさわしくない。流動様式では、労働力に投ぜられた資本とまったく一致しているからである。
- ・他方、流動資本の側に置かれるわけにもゆかない。固定資本対流動資本という対立と不変資本対可変資本という対立との同一視がそれ自身を廃棄するからである。(?)

### 319 頁後 2 行目

\*ここで注意されるべきは、

- ・資本家が労賃に投じる資本（労賃への前貸し資本）。
  - ・労働者から資本家に労働で与えられる前貸が、資本家が可変で労働者に与える前貸に変えられてしまう。（労賃は、前払いではなく、後払いとされる。）
  - ・（この支払は、）流通において剰余価値を含めた価値の回収・実現がされるかどうかは関係ない。
  - ・資本家が機械の全価値を前貸ししなければならない。流通からは少しずつしか還流しないのではあるが。

### 321 頁 1 行目

リカードにおいては。

- ①・可変資本の特徴は、（自らの価値を再生産するだけではなく、）剰余価値を生産する労働力と交換されるということである。
  - ・（この特性も、流通の場で、労働手段に投ぜられた固定資本にたいして流動資本として現われるならば、たちまち消えてしまうのである。）
  - ・この資本部分が不変資本の（一つの成分である）労働材料に投ぜられた成分といっしょに、流動資本という部類に入れられて、不変資本の労働手段に投ぜられた成分に対置される。（この場合、剰余価値は、まったく無視される。）
  - ・労賃に投ぜられた資本が生産物につけ加える価値部分は、原料が生産物につけ加える価値部分は、ただ、生産物価値のなかに維持され保存されるだけであり、生産物の価値成分として、ただ再現するだけである。
  - ・そのとき、流動資本と固定資本の対立の観点から現われる区別は、次の点である。
    - ・商品の生産に充用される労働手段の価値は、一部分ずつその商品の価値にはいつて行き、（その商品の販売によって一部分ずつ補填されて行き、）少しずつだんだんに補填されて行くだけである。
    - ・他方商品の生産に使用される労働力と労働対象（原料など）との価値は、全部その商品のなかにはいつり、その商品の販売によって全部補填される。

\*そのかぎりでは、流通過程に関しては、資本の一方の部分は固定資本として現われ、他方の

部分は流動資本として現われる。

\* どちらの場合も問題は、与えられた前貸価値の生産物への移転であり、生産物の販売による前貸価値の再補填である。

※ 区別は、価値移転・価値補填が、少しずつだんだん行われていくか、一度に行われてしまうかという点にあるだけである。

※ 可変資本と不変資本の区別は消されてしまう。

※ 労賃に投ぜられた資本と、原料や半製品や補助材料に投ぜられた資本部分とは一つの特殊な流通様式が共通なのであって、これによって労働手段に投ぜられて、資本部分に対立するのである。

### 322 頁 2 丁目行目

\* 「不変資本と可変資本」と「固定資本と流動資本」の混同

・ブルジョア経済学では、労賃に投ぜられた資本部分は、原料に投ぜられた資本部分とは、もはや全然区別されない。

・ただ単に少しずつ流通させられるか、全部いっしょに流通させられるかによって、不変資本から区別されるだけである。

・ただ前貸価値の再現が問題になるだけである。

\* リカードは、スミスの混同の無批判的な受け入れで、A・スミス自身の場合に比べてもより攪乱的になっている。

### 323 頁後 7 行目

\* 重農学派は混同が見られない。

・重農学派ではこのような混同は見出されない。

・年前貸と原前貸との区別は、資本（特に農業資本）のいろいろな成分の再生産期間の相違だけに関するものである。

・剰余価値の生産に関する見解。剰余価値の形成が資本そのものからは説明されないで、農業だけのものとして主張される。

### 323 頁後 1 行目

リカードにおいては。

② 可変資本の規定から。

### 325 頁 2 行目

\* 同じ金属が、一方では固定資本に。他方の場合には、流動資本に。

・素材的性質や損耗どの大小によるものではない。生産過程において、労働手段として、他の場合には労働対象としての役割からによるものである。

### 325 頁 7 行目

\* 生産過程における労働手段の機能

・労働手段が作られる素材の耐久性が、労働手段を固定資本とするのではない。

「商品資本と生産資本との区別を流動資本と固定資本の区別と混同する経済学者において

は、同じ材料、同じ機械が、生産物としては流動資本であり、労働手段としては固定資本である。」

#### 326 頁 3 行目

\* 労働力に投ぜられる資本部分。

「流動資本を規定することになるのは当然である。」

#### 326 頁 9 行目

\* 労働賃金に投ぜられた資本の現実の素材は労働そのものである。

「資本家が自己の資本に合体させた生きた労働」

「労働力に投ぜられた資本部分は、労働手段に固定されたままの資本と対立して、流動資本という性格を与えられるのである。」

#### 327 頁後 9 行目

\* 「労働力に投ぜられた資本価値は、いまでは（剰余価値とともに）生産物に付加された価値である。」

「労働力に投ぜられる資本部分は、流動資本という性格を与えられるのである。」

#### 327 頁後 4 行目

\* 「労働力に投ぜられた資本部分、流動資本に投ぜられた価値は、この資本の消費によって生産される生産物に（剰余価値とともに）付加された価値である。」

\* 「固定資本は、より緩慢に損耗し、より緩慢に補填されるべき労働手段から成り、労働力に投ぜられた資本は、より急速に補填されるべき生活手段からなる

※ 区別について、リカードは言う。

「資本が急速に損耗するものであって、頻繁に再生産されなければならないか、それともゆっくり消費されるものであるかにしたがって、それは流動資本の項か固定資本の項かに分類される。」

#### 330 頁 1 行目

\* リカードは、固定資本と流動資本との区別を、種々の事業部門における等額の資本について両者の比率が価値法則に影響を及ぼすかぎりにおいて考察し、結果として、労働賃金の騰落がどの程度まで物価に影響を及ぼすかを考察しているにすぎない。

\* 彼は、固定資本と流動資本を、不変資本と可変資本と混同している。

#### 333 頁後 1 行目

※ リカードは、不変資本にたいする可変資本の比率を、固定資本にたいする流動資本の比率と混同している。（このことが、利潤率に関して、誤りとならしめている。）

・ リカードは（どこでも）不変資本にたいする可変資本の割合を固定資本にたいする流動資本の割合と混同する。（これが、どんなに彼の利潤率の研究を遅らせていることか。）

・ リカードは、固定資本と流動資本との区別とは別の原因から生ずる回転上の区別を、固定

資本と流動資本との区別と同一視している。

- ・「農業者が播種（はしゅ）のために買った小麦は、パン屋がパンにするために買った小麦に比べれば固定資本である。前者は地中に放置し、1年間回収できない。後者はそれを粉にひかせパンを焼き客に売る。そして資本を自由にして、さらに仕事を始めることができる。」
- ・小麦は播種用としては生活手段だから流動資本であり、その還流が1年間なので固定資本だという。しかし、生産手段を固定資本にするものは、それが生産物に価値を引き渡す特定の仕方なのである。

### 335 頁 1 行目

\*A・スミスによってひき起こされた混乱は、次の結果を導く。

- ① 固定資本と流動資本の区別が、生産資本と商品資本との区別に混同される。
- ② すべての流動資本が、労賃に投ぜられた資本または労賃に投ぜられるべき資本と同一視される。
- ③ 可変資本と不変資本との区別が、流動資本と固定資本の区別と混同されているが、ついには流動資本と固定資本との区別に還元されてしまう。
- ④ イギリスの経済学者たちでは、固定資本と流動資本の区別が、要求払預金と通知預金との区別になってしまう。